

作者からのメッセージ

「帰り道」 (六年)

森 絵都

「帰り道」の風景

帰り道は、学校に通う子どもたちの全員が例外なしに持っているものです。学校へ来たからには、帰らないわけにはいきません。誰もがそれぞれの経路をたどって家へ帰ります。そのそれぞれの道に、少しばかり色を添えることができたら……との思いが今回の短編「帰り道」の出発点でした。

私自身の子ども時代をふりかえると、帰り道は必ずしも楽しいものではありませんでした。基本的な「行く」よりも「帰る」ほうが面倒くさいものです。勉強疲れもあります。家に帰ったらあれもやらなきゃ、これもやらなきゃと考えて憂鬱になることも、学校での失敗を引きずって足が重くなることもありました。元氣潑刺と帰り道を謳歌している子どもの姿はあまり見たことがありません。

しかし、だからこそ、作中のちよつとした出来事によって、その帰り道を照らすことができたなら、と考えたのです。昨日ま

では何も起こらなかった帰り道——でも、今日は思いがけない何かが起こるかもしれない。そんな期待を胸に抱くことで、少しでも子どもたちの足どりが弾んでくれたらと。

かくして帰り道という舞台が決まり、つぎに作中人物を考えました。まずは、心に重いものを抱えて道を行く律の姿が頭に浮かびました。なぜ暗い顔をしているのか。彼の問題を追っていくうちに、その原因を作った周也の姿も見えてきました。

律と周也。異なる二人の視点から、それぞれの「帰り道」を語らせる。この作法は最初から決めていたものです。歩んでいる道は一緒でも、律の目に映るものと周也の目に映るものはまるで違います。心の中も違います。物語を通じてその相違を感じとることは、「人は自分と同じことを考えていない」という事実を理屈ぬきに理解することに繋がるのではないかと思います。別々の人間なのだから違って当然。それをさびしがらよりも面白がろう。個々の相違



は得てして否定的に捉えられがちですが、私は律と周也の多視点の語りから、読者の子どもたちがそれを肯定的に受けとめてくれたらと願っています。

律と周也が気まずくなった原因を「言葉」にまつわる齟齬としたのは、私自身、子ども時代はよく言葉に悩まされていたせいかもしれません。私は思っていることをなかなか口に出さない子どもでした。学校の先生や友達に対してだけでなく、家族に対してもそうでした。どうせうまくしゃべれない、という自信のなさがありました。加えて、何もかも言葉にしなければならぬのか、という疑問や抵抗の感情もありました。そのくせ、なんでもかんでも言葉にできる子たちを羨み、自分だけが損をして

いるような僻み根性をもてあましていたのです。

ですから、思いをなかなか言葉にできない律を理解するのは、私にとってさほど難しいことではありませんでした。律の対極にいる周也は手こずる恐れもありましたが、不思議とそうはなりませんでした。自分とは懸け離れた男の子を書くことで、逆に、しゃべらずにはいられない子どもたちの気持ちが鮮やかに私の中へ流れこんできたのです。

枚数に制限があったため、原稿では触れていませんが、周也のパートを書くにあたって、私は「なぜこの子はこんなにべらべらしゃべるのか」と考えました。生い立ち。家族構成。家庭内での役割。そうして周也に接近することで、絶えず言葉がふりまいている子にもその子なりの事情がある、とずとんと腑に落ちたのかもしれない。

子どもたち、言葉を上手に操る子たちをただ羨むのではなく、もっと相手の胸中を想像してみればよかったと今は思います。相手への理解が自分自身の心を軽くしてくれるのはよくあることです。

物語は私たちに多くのきっかけを与えてくれます。律と周也の「帰り道」が、読んでもくれる子どもたちに新鮮な発見をもたらしてくれるように。



教科書に掲載している二次元コード。森さんが「帰り道」について語っている動画を見ることができます。

もり えと 森 絵都

1968年、東京都生まれ。作家。90年『リズム』で講談社児童文学新人賞を受賞しデビュー、同作品で椋鳩十児童文学賞を受賞。『風に舞いあがるビニールシート』で第135回直木賞を受賞。『DIVE!!!』『クラスメイツ』など、10代を主人公にした作品多数。